



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2019年12月1日 第3号

巻頭言 共犯者たちの集い

DPC 所員 関野 和寛

教会の集いや交流を表す「コイノニア」という言葉がある者は「共犯者たちの集い」と訳した。名訳である。礼拝とは罪人が集い、神に赦されそして互いに赦し合い、再出発する場所であろう。

私が牧会するルーテル東京教会では二つのA（アルコール依存症自助会）の会合が定期的に行われている。また薬物依存、アルコール依存、窃盗癖、セックス依存症、自死願望、また様々な癖を持った方々が日常的に教会にやって来る。

これは教会の立地が新宿、歌舞伎町という「土地柄」ではなく「人柄」によりそのような状況の人々が教会に相談に来るのである。私の人柄と言いたいところだがそうではなく教会全体の人柄がそのようになってきたからであると感じている。

そのきっかけになったのは、新宿ダルクとの共催による、先日、薬物所持で再逮捕された田代まさし氏の講演会であった。当日はダルク職員、当事者、援助者など実に様々な人々が教会に集まり、田代氏によるユーモアたっぷりの講演に皆で笑いながら耳を傾けた。



変化が起きたのはそこからだ。その後様々なアディクションと闘う人々が教会に集いだしたのだ。日本において教会は「聖人君主しか行けない場所」「クリスチャンでないと行ってはいけない場所」とさえ思っている人が非常に多い。教会側も「依存症＝凶悪な人」という誤解を持ち、そのような人々を招く事に躊躇してしまっている。ひとつの講演会によりその誤解を少し解く事ができたのだ。

ダルクの代表は「依存症は寂しさの痛みの病」と語る。ひとり一人に出会えば、まじめな人、繊細な人が多いと感じた。そしてそこには病名で線引きできない、生きるという痛みを全ての者が抱えているのだ。

教会の集い「コイノニア」は清さや正しさを共有するのではなく、寂しさ、痛み、そしてそこから生まれてしまう罪を赦し合う聖なる共犯者たちの集いなのではないだろうか。「罪人を招くために来たのだ」というキリストの言葉に真に招かれる時、教会の集い、コイノニアは真実のものになっていくのであろう。

牧会研究会 ～寄り添いびととなるために～

デール・パストラル・センターの3つの分野の1つに「Pastoral（パストラル）」という大きな柱があります。この分野の活動は、教会の牧会力を高めることを第一の目的としますが、それに加えて牧会者自身も支えられることを大切に考えています。

2016年度から始められ現在4年目を迎えた牧会研究会は、Pastoral分野の主軸となる働きであり、牧会者を対象として年間10回の研究会を行っています。牧会の現場で直面する様々な課題を取り上げ、講師の講義を聴き、互いに分かち合い、ワークショップも取り入れながら豊かな学びを重ねています。

研究会ではDPC所員がそれぞれの専門分野に基づき講義をしますが、年度により「牧会カウンセリング」の理論・技法に重点を置いた講義の回数を多くとることもあります。

牧会者の皆様にとって学びの場にとどまらず、よき交わりの場であり、またなにより魂の養いの場として今後も用いられることを願うものです。

本稿では、この研究会の発足当初よりご参加いただいているお二人の方に研究会を受講されてのご感想をお寄せいただきました。

神と人に仕えるものとして

日本聖公会 東京教区 浅草聖ヨハネ教会

牧師補 執事 クララ 佐久間 恵子

「牧会研究会」を主催してくださっている日本ルーテル神学校、デール・パストラル・センターと石居基夫牧師、スタッフの皆さま、講師の先生方、そして今まで学びの時を共にしてくださった多くの牧師先生方に、心より感謝を申し上げます。

私にとって月に一度のこの研修会のひとは、ともすれば日常業務に取り紛れ、自分自身を客観的に眺め、考察する機会を蔑ろにしてしまいがちな自分に気づかせて頂いたり、同じような仕事上の、立場上の悩みを共にしてくださる先生方との出会いの場を作って頂ける、とても貴重な場所として、今や欠くべからざるものとなっています。

講師の先生方の、各回のテーマに従ったご講義を聴く時は、素直に学生に戻ったようなフレッシュな気持ちになります。そして様々な教派の先生方との毎度のディスカッションのひとは、自分一人では気づかなかった視点を示されたり、

柔軟な視野でものごとを見ること、判断することに改めて目を開かされたりで、新鮮な空気を胸一杯に呼吸しているような気持ちになります。

研修会に参加する度に自分の狭さと、知らず知らずのうちに目先のことに捕らわれ、視野狭窄を起こしているおのれに気づかされ、またイエス様のお示しくださっていることとは何か、そして神と人への「仕え人」としての自らの有りようを、今一度深く考えさせられる、そんな本当に大切な時間をDPCの「牧会研究会」は、与えてくださっていることに、とても感謝しております。

私の所属しております日本聖公会は、「執事・Deacon」という職制を持っており、私自身の現在の職位でもあります。ディアコニアを語源にもつ、この職位は「神と人に仕える」まさに私の召命であり、一生の課題でもあります。DPCの研究会を通して、この課題に向き合い続け、イエス様の示される道を歩み続けられたら、と願っています。



このままでいいのか？

日本基督教団 牛久教会

牧師 金子 敏明

「日本の神学教育は“語る”ことばかり教え“聴く”ことを軽視してきた」。これは20数年前、私が神学校在籍時に牧会学の先生から聞かされた言葉ですが、今も状況は変わっていないように思われます。社会の状況は刻々と変わり、当時は無かったいくつもの事柄が生じてきました。たとえば発達障害や人格障害といった事象です。私自身、牧会に行き詰まりを感じる中で「もう一度学び直しを」との思いを持ち、研究会発足初年度から参加しています。

この研究会ではカウンセリングの技法だけでなく、牧会の対象となるクライアントのライフサイクルについて、また多様な障碍についての基本的な事柄について、さらに牧会者自身の霊的養いについてなど、実に多様な学びを得られます。どの学びも印象深いのですが、その中で関野牧師による「ステファン・ミニストリー～牧師と信徒の共同牧会」は牧師が疲弊しきっている中での、牧

会の希望を示してくれたように思います。

またルーテル教会のみならず、聖公会、日本基督教団、同盟教団、ホーリネスなどまことに多様な教派・教団から集まっていることも特筆すべきことです。これほど広範囲な牧師たちの学びの機会には珍しいのではないのでしょうか。

さて、今後の研究会についてですが、基礎的な学びと並行して、より実践的な学びができないもののでしょうか。たとえば病院や施設での実習、ケース検討などです。またテーマとしては「カルト被害者への牧会」「教会から離れた人へのケア」などに関心があります。微力ではありますが、DPCのお力に今後なれればと願っております。



牧会研究会のひとコマ、講師は齋藤所員

2020 年度牧会研究会のご案内

デール・パストラル・センターでは、2020 年度も、牧会者の皆さまを対象とする月例の「牧会研究会」を開講いたします。

本欄では簡単な一覧でのご案内となりますが、別途、詳細なご案内および申込書をお送りするよう用意を進めております。

日時：毎月第2金曜日午後1時30分～3時30分（8月・12月は休会）

会場：日本福音ルーテル東京教会（新宿区大久保1-14-14）

受講料：20,000円（年間10回分）

- ◆ 4月10日 「日本の牧会のこれまでと課題」（関野 和寛）
- ◆ 5月8日 「家族療法の応用 牧会カウンセリング講座1」（堀 肇）
- ◆ 6月12日 「人間のパーソナリティ（気質）に基づくカウンセリング」（ジェームス・サック）
- ◆ 7月10日 「発達心理学の応用 牧会カウンセリング講座2」（堀 肇）
- ◆ 9月11日 「牧会者の危機～失敗と挫折から～」（石居 基夫）
- ◆ 10月9日 「交流分析の応用 牧会カウンセリング講座3」（堀 肇）
- ◆ 11月13日 「霊的同伴のあらし」（齋藤 衛）
- ◆ 1月8日 「フランク心理学の応用 牧会カウンセリング講座4」（堀 肇）
- ◆ 2月12日 「スピリチュアル・ペイン（心の痛み）とそのケア」（ジェームス・サック）
- ◆ 3月13日 「キリスト教的愛と心理療法 牧会カウンセリング講座5」（堀 肇）



●霊性（スピリチュアリティ）を学ぶとは

デール・パストラル・センターには「クリスチャン・スピリチュアリティ/キリスト教霊性」を考える部門があり、概ね2ヶ月に1回のペースで会合を持っています。その会合では所員が自身の関心あるテーマについて発表し、意見を交わして互いに学び合います。これまでに「テゼ共同体」「トマス・マートン」「シモーヌ・ヴェイユ」「カルメル会」「ルターの霊性思想」「ドミニコ会」「孤独」「聖書黙想」「レクチオ・ディビナ」など、さまざまなテーマが取り上げられ意見を交わしました。一見脈絡なきこれまでの経過と思われそうですが、プロテスタント教会に身を置く者がどうやって霊性を捉え、教会に貢献するかを探るプロセスであると思っています。

ある回はフランスのテゼに行ったことのある所員がスライドを使って経験を紹介し、テゼで何が行われているか、またなぜ多くの若者が世界中から集まるかを考えました。別の回は所員が経験したある修道会での観想祈祷がレポートされ、沈黙の有用性を考えました。あるいはまた、牧師である所員たちそれぞれが実際に教会で行っている聖書の会を実践し、みことばを思い巡らすことの大切を語り合いました。

●「黙想」から「みことばの黙想」へ

こういった学びは今後も継続する予定ですが、現時点で関心の的を絞るとすれば「みことばの黙想」の実践となります。単に黙想と呼ぶのではなく「みことばの黙想」と敢えて呼びたいものです。というのも、ルターの聖書の読み方から教えられるのは、黙想を神のことばから切り離さないことであり、神のことばを自分自身に語りかけられたことばとして全存在をもって聴くことだからです。つまり、一般に霊性や黙想という言葉を知ると瞑想のイメージと混同しが

ちです。静かにして、自分自身の心を内省し、心に静寂を取り戻すことかと思われるのではないでしょうか。確かに瞑想はそれでしょう。しかし実践したいみことばの黙想は、はっきりと「みことば」を通して聖霊の働きかけを受け取るものです。問題は、みことばからどう聴くかということです。あくまでもこちらが受け取るという態度を大事にした黙想です。

その意味で私たちがこだわりたいのは、黙想の「みことば性」そして「受動性」です。十分な聴き手となることによってこそ、みことばを通して聖霊が来られる。そして聖霊が伝えようとしていることを知ることとなります。

これまで多くのプロテスタント教会では黙想よりも「聖書研究会」の方がなじみのある言葉ではなかったかと思います。みことばの解説を聞き、勉強し、解釈をしてゆきます。それが多くの教会でなされたことでしょう。これはこれで、みことばを探求する大切な機会です。意義深い機会と思われます。ですが、こちらが考え分析し解釈するみことばではなく、何も持たない者として、そこに告げられるみことばを粘り強く聴くという経験は、研究することとはまた違うみことばとの出会いが果たされることでしょう。その意味で、黙想というこの恵みの機会を教会でどのように実践できるかを検討しています。

十年程前に私はある黙想会を経験し、知的探求では得られなかったみことばの世界の新たな開かれ方を知りました。それは何も持たない自分を知らされることであり、対してみことばの力と愛おしさを経験することでした。これはいったいどのようにして起こっているのか、たいへん不思議な思いを抱いたものです。以後いくつかの黙想会に参加しながら、霊によってみことばを読むことを考えてきました。

●レクチオ・ディビナとルターの黙想

この問題意識に答えてくれる黙想方法の一つにレクチオ・ディビナ（聖なる読書）があることを知りました。これはローマ・カトリック教会で培われてきたみことばの黙想の一つの方法です。実際は黙想にとどまらず観想を目指し、主との出会いの恵みを味わうところまで行くのですが。聖書を、読み・黙想し・祈り・観想するという四つの段階を経て神と共にあることの恵みに至る道のりです。そして、おそらくこれはルターも修道士時代に経験した手法だったと思われる。

このレクチオ・ディビナは私が抱いた不思議を整理するのに大いに助けとなりました。特に祈りの段階でみことばの示すところを神に尋ねそして聴くという、霊による相互性を知りました。

しかし、一方でルターはどのように言っているかを気にしないではいられませんでした。というのも、ルターが述べている聖書の読み方にあるのは、その順序と内容が違っています。そこには従来の黙想方法への批判的な眼差しが感じられるのです。それは「祈りと黙想と試練によって読むこと」でした。

ルターはドイツ語著作全集第一巻への自序にこのことを記しています。

第一に自分の考えや理解力に絶望し、聖霊が導き理解させてくださるように祈れ、と言います。続いて第二に黙想すべきと記す。この黙想は「心のなかだけでなく」とありますので、声を出して読めということでしょう。それはほかでもない、自分が聴く者とされるということだと思います。

私たちが声を出して読む時、自分自身は読み手でありながら同時に聴き手となっています。ルターは声に出して読むことでこの聴き手・受け取り手になることを求めたのではないのでしょうか。自分自身に語りかけられた『外からの言葉』として聴きなさいということです。さらには、熱心に何度も（反芻し）注意深く聴くことを勧めています。黙想の焦点はこの「外なるこ

とば」に向けられてゆきます。外から語りかけられたみことばを内的に聴くことになります。

また、すでにお気づきと思いますが、このルターのみことばの読み方には、「観想」がありません。代わりに置かれているのは「試練」です。第三として試練において読むことを勧めています。神の言葉を受け取るなら、そこには愉悦ではなく試練が起ると。

つまり、ルターが修道士時代に習った伝統的な黙想（おそらくレクチオ・ディビナ）は、心の祈りや天的悟りを得るために、みことばをステップの一つにしていたと思われます。目標は栄光の主イエスと一体となることを通して達成される観想にありました。天の喜びへとはしごを上るように地から天へ昇ります。そうやって栄光の主イエスと一体となる観想という境地に至ろうとした。上に上がるベクトルです。

対してルターは、それとは逆のベクトルを示しているのです。外から来られた神のみことばを受け取って、受け入れて捉える黙想。私たちは外からの、上からのみことばを、あくまでも受容する者なのです。そうやって、自分自身は決して上に行く者ではない。むしろ、試練を受けるのです。それは、聖霊の働かれるところ敵対する勢力が働くということです。そうやってさらに、試練の中で、みことばを通して聖霊の深き心を聴き取ることになります。霊と妨げと自分との三すくみの格闘がそこに現れます。これが試練で読めとしたルターの思いではないでしょうか。

すなわち、このみことばの黙想で到達するのは天上の歓喜ではなく、十字架の霊性なのです。

この黙想が私たちの教会で重ねられることができたらと検討を重ねています。実際にどのようなプログラムを提供できるのか、まだまだ緒についたばかりですが、ルター派をはじめ教会にとっての「みことばの黙想」をさらに追い求め、教会に貢献できるまでゆきたいと願っています。私たちの働きが、福音的霊性をなんとか教会に提供しようとする地道な準備の場となるよう願っています。

2019年2月、第3回臨床牧会セミナー（第53回ルーテル教職セミナー）は「危機のただ中に立つ牧会～あなたを支えたい～」というテーマを掲げ、今日の牧会の現場の困難な諸問題について分かち合う機会を得ました。基調講演は「ぶっ壊して、造り上げる牧会～牧会のダイナミクス」（講師：関野和寛牧師）、分科会は「心の病～牧者として心得ておきたいこと」（河村従彦先生）、「教会とハラスメント」（城倉由布子先生）、「現代の結婚事情を考える」（堀肇先生）、「高齢者の危機—その援助と克服を考える」（賀来周一先生）の4講座をお願いし、それぞれに濃い学びでありました。セミナーの終わりにあたり、石居が短いまとめをいたしました。以下はその要旨です。



危機のただ中に立つ牧会 ～あなたを支えたい～

DPC 所長 石居 基夫

【危機のコンテクスト】

人生のそれぞれのライフサイクルの中に危機があります。子ども、中学・高校、大学生の時代。親との関係の問題。結婚、就職、転職。引退し、高齢者になる。死を迎える。それぞれの危機を考える必要があります。しかしまた、私たちの人生における危機というものは、時代によって大きく変化するという点でもあります。

今一つは文化や地域性ということ。牧会の現場が、どういう文化の中にあるか。日本の文化の中での人間関係、価値観、宗教性、そうしたことを知っていくことは大事な要素です。それぞれの危機のコンテクストを私たちは念頭に置きながら考えていかなければいけないと思います。

私達が直面しているのは、大きな流れの中に置かれている、現代の危機です。客観的に、今の時代に生きる者としての私達自身の姿を見る必要があるのです。

【現代の「危機」】

振り返ると、60年代の高度経済成長の中で大きく産業構造が変わる中で、家族のあり方、地域との結びつき方が変わりました。80年代の半ばに、第三次産業が全体の半分以上を占めていくことになり、同時に終身雇用から転職が当たり前の時代になりました。会社を支えに家族を守るという生活がなくなっていったのが80年代の終わり頃から90年代のバブルの頃です。非正規雇用が増え、

かつて皆が中流と言われた、その中流がなくなり格差社会と呼ばれる変化が起きます。

ソ連の崩壊、バブルの崩壊、そして3.11以降は特に原子力の平和利用ということで戦後を引っ張ってきたある種の理念が崩壊していく。また温暖化等、環境問題に直面しました。私たちの生活の基盤が変化してきたのです。

人間関係も変わりました。90年代後半以降、コンピューターを使ったネット社会の中で結びついていく。しかしそれで人間関係が豊かになったのかと言うと、関係が希薄になっていく。赤ちゃんが泣くと、親がスマホを与える。コンビニで子どもが静かになる。真の意味で子どもが発達に必要なものを与えられたのか、と考えさせられます。

便利さの中で支えられるものもあります。様々なニーズに直面する人たちが、いつでもどこでも、ネットで支援を求めることができる。けれどもまだまだ実験の段階です。

少子高齢化の時代、必要なのは教育と福祉なのにお金がない。最も必要なところに手当ができない。その負担を求める先は、個人責任、自己責任、そして家族です。日本的な家族神話です。

子育ても高齢者介護も、本来、福祉や地域社会のサポートが要ですが、虐待が起きても踏み込めない。人材がいない。余裕がない。それは私たちが直面している牧会の現実でもあります。そうした現実が今の社会の中にあるということをしっか

りと捉えていかなければいけないと思うのです。

【人々の心と魂の問題】

ストレス社会、また格差社会という現実が 90 年代の後半から 2000 年代にかけて顕著になりました。この中で崖っぷちに立っている私達は大きなストレスを持っています。弱い人にそういったしわ寄せがいきます。お年寄りや子ども、障害を持つ方、傷つきやすい心を持っている方にしわ寄せがいくのです。70 年代後半から心の Emptiness ということが言われ、80 年代は心の時代あるいは宗教の時代ということで、たくさんの宗教が生まれ、そこにカルトもあったわけですが、宗教が求められた時代でした。

ところが、95 年のオウム真理教の地下鉄サリン事件後、宗教離れが起きます。宗教を求めない、近づかない。オウム真理教に入ってきた人達は、高い学歴と社会的地位を持ち、経済的にも豊かだった。その彼らが、しかし深い Emptiness を持っていたのです。教会は何をしていたのか、そこに手当てをしていかなければいけないということを考えさせられたことです。

【牧会の現場としての教会】

教会は居場所です。居場所を求めて心が傷ついた人達が来ます。しかし教会が言っているのは、今いる人達の居場所ということではないかと。新たに来る人の受け入れが難しい。

教会は、危機に立つ人をどう迎えているのか、互いに仕え合うということが具体的な形になっているか。信徒も含めて、キリスト者としての生き方が、具体的にどう形成されるか。その一つの群れがどういう形でダイナミズムを起こし、全体の雰囲気を変えていくか。新しいムーブメント、新しい動きを作らなければなりません。

私達は、自分が見出された 1 匹で、私が見出されていると思っています。では 99 匹はどうなっているのか？教会に来ていないということではないか。私が見出されたと思う、それはすごくだいじ

な福音です、でもそれだけではないのです。他の 99 匹が教会の外で待っていることをどう考えるか、自分だけを見つめてはわからない。宣教というのは教会の中ではなく、社会の中にどういう役割を持って牧会をしていくのかということです。私達がキリスト者としてこの地域社会の中、弱い人や困難を抱えている人とどうやって一緒に生きていくことができるか、その中でこそ福音が伝えられていく、見出されていくのでしょうか。牧会あるいは宣教の形を問われる時なのです。

【牧会（宣教）の形を求めて】

教会にもいろんな違いがある。しかし、キリストが私達の中に働いて生かされていく時に、エキュメニカルだ福音同盟だ、社会派だ教会派だと言われてきたように、教会の中にも様々な二元論がある。そこにある壁を越えなければ、教会の中と外とは越えられない。ここを繋いで行かなければ意味がないのです。

多様な世界に福音がどう伝わっていくか。女性、障害者、子どもや高齢者が犠牲になっていたのではないか。改めて気づかされて、いろんな形で声を出している。今、教会が何を提示できるかということが問われています。

以前、マッケンジー先生が日本の教会に必要なのは縁側と境内だと言われました。お寺には境内があってそこに自由にいろんな人が入ってくる。縁側でお茶でも飲みながらお花を愛でながら、自然の交わりがある。教会の中と外の Boundary を壊して繋げていくことが必要です。

教会はそれぞれ違います。その課題を教会みんなで考える、自己診断をしていくこと。自分たちが決めること。牧師が決めるのではなく教会が決断をするということが大事です。教会が自分たちでどうするかを決めなくちゃいけない、それが牧会の基礎です。自分たちがどういう状況にあるのか、脈絡にあるのか考えて福音を伝えていくことが必要だと思うのです。



この1冊

DPC 所員からのお薦めの本をご紹介しますコーナーです。今回はスピリチュアル分野より
サック所員からの1冊です。

『気づきの奇跡 暮らしのなかの瞑想入門』

ティク・ナット・ハン著 池田久代訳 春秋社 2014年、2,000円＋税

ティク・ナット・ハンは、ベトナム出身の禅僧、平和・人権運動家、学者であり詩人でもあります。彼は1982年に南フランスにプラウムヴィレージ瞑想センターを設立しました。100冊以上の本を出版しています。

「気づきの奇跡」(The Miracle of Mindfulness)は個人的な時間を増やすだけでなく、生きているすべての瞬間に贈り物を実現する方法を説明します。マインドフルネスを通じて仕事を楽しみ、仕事と一体感を味わう方法を示します。マインドフルに仕事をすれば、否定的な感情はすぐに消えていきます。訓練すれば、「今ここ」、この瞬間の安らぎと喜びを見つけ出せます。

例えば：『皿を洗うときには、ただひたすら皿洗いに専念します。皿を洗う時には皿を洗うことに完璧に気づいています。「皿洗いは二つの洗い方があります。皿をきれいにするためと、皿を洗うために皿を洗うことです。皿を洗うのはいやな仕事といわんばかりに、食器の山を早く片づけることばかり考えていては「皿を洗うために皿を洗う」ことにはなりません。そんな洗い方をしていると、あなたが生きて皿を洗っているとは言えなくなります。流しの前に立っている間、生きているという実感がなくなり、命の不思議に触れることが出来ないのです。』

ティク・ナット・ハンがトルストイの素晴らしいお話も伝えています。

お話の中で、次の3つの大切な質問が問われます：『ことをなす最良の時はいつですか？』『共に働くいちばん大切な人は誰ですか？』『なすべきいちばん大切なことは何ですか？』このお話を2回読んだ後、私の、時間や他の人に対する見方は劇的に変わりました。

この短い本の最後に、簡潔で有意義なマインドフルネスの瞑想が紹介されています。著者は仏教信徒ですが、クリスチャンの方のためにもとても参考になる内容だと思います。私はこの本を強く勧めます。

(DPC 所員 ジェームス・サック)



●『詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～』第Ⅲ期

ご好評をいただいております本講座の第Ⅲ期が2020年4月に開講いたします。日程は1月半ばに本学ホームページにてお知らせいたします。お申し込みの受付開始は2月の予定です。

●ソーシャル部門「だいじな人をなくした子ども」と「だいじな人をなくした子どもの保護者」の集まり

今年度の今後の日程は、1月11日(土)、3月28日(土) 両日共13:30-16:00。必要な方にぜひご紹介ください。

●ルーテル学院の振替用紙を同封させていただきます。今年度より、「デール・パストラル・センター指定献金」をお受けできるようになりました。今後とも皆様の尊いお支えを賜りますようお願い申し上げます。

★ ★ ★

☆編集後記 DPCは、何かに一石を投じる、というような大きな働きをすることはありませんけれども、この1年も、少なくない方々と新たに出会い、有形無形のものをお渡しし、またいただくことができましたことに、こころより感謝いたします。皆様の新しい年が、主の豊かなみ恵みにみちあふれますように。



発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：石居 基夫
181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580 (直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp http://www.luther.ac.jp/